Oracle® Universal Content Management

製品概要

10*g* リリース 3（10.1.3.3.0）

部品番号 : E05628-01

2007 年 8 月

ORACLE®

Oracle Universal Content Management 製品概要 , 10*g* リリース 3（10.1.3.3.0）

部品番号 : E05628-01

原本名 : Oracle Universal Content Management Product Overview, 10*g* Release 3 (10.1.3.3.0)

原本部品番号 : A00030-01

原本協力者 : Sandra Christiansen

Copyright © 2007 Oracle. All rights reserved.

制限付権利の説明

このプログラム（ソフトウェアおよびドキュメントを含む）には、オラクル社およびその関連会社に所有権のある情報が含まれています。このプログラムの使用または開示は、オラクル社およびその関連会社との契約に記された制約条件に従うものとします。著作権、特許権およびその他の知的財産権と工業所有権に関する法律により保護されています。

独立して作成された他のソフトウェアとの互換性を得るために必要な場合、もしくは法律によって規定される場合を除き、このプログラムのリバース・エンジニアリング、逆アセンブル、逆コンパイル等は禁止されています。

このドキュメントの情報は、予告なしに変更される場合があります。オラクル社およびその関連会社は、このドキュメントに誤りが無いことの保証は致し兼ねます。これらのプログラムのライセンス契約で許諾されている場合を除き、プログラムを形式、手段（電子的または機械的）、目的に関係なく、複製または転用することはできません。

このプログラムが米国政府機関、もしくは米国政府機関に代わってこのプログラムをライセンスまたは使用する者に提供される場合は、次の注意が適用されます。

U.S. GOVERNMENT RIGHTS

Programs, software, databases, and related documentation and technical data delivered to U.S. Government customers are "commercial computer software" or "commercial technical data" pursuant to the applicable Federal Acquisition Regulation and agency-specific supplemental regulations. As such, use, duplication, disclosure, modification, and adaptation of the Programs, including documentation and technical data, shall be subject to the licensing restrictions set forth in the applicable Oracle license agreement, and, to the extent applicable, the additional rights set forth in FAR 52.227-19, Commercial Computer Software--Restricted Rights (June 1987). Oracle USA, Inc., 500 Oracle Parkway, Redwood City, CA 94065.

このプログラムは、核、航空産業、大量輸送、医療あるいはその他の危険が伴うアプリケーションへの用途を目的としておりません。このプログラムをかかる目的で使用する際、上述のアプリケーションを安全に使用するために、適切な安全装置、バックアップ、冗長性（redundancy）、その他の対策を講じることは使用者の責任となります。万一かかるプログラムの使用に起因して損害が発生いたしましても、オラクル社およびその関連会社は一切責任を負いかねます。

Oracle、JD Edwards、PeopleSoft、Siebel は米国 Oracle Corporation およびその子会社、関連会社の登録商標です。その他の名称は、他社の商標の可能性があります。

このプログラムは、第三者の Web サイトへリンクし、第三者のコンテンツ、製品、サービスへアクセスすることがあります。オラクル社およびその関連会社は第三者の Web サイトで提供されるコンテンツについては、一切の責任を負いかねます。当該コンテンツの利用は、お客様の責任になります。第三者の製品またはサービスを購入する場合は、第三者と直接の取引となります。オラクル社およびその関連会社は、第三者の製品およびサービスの品質、契約の履行（製品またはサービスの提供、保証義務を含む）に関しては責任を負いかねます。また、第三者との取引により損失や損害が発生いたしましても、オラクル社およびその関連会社は一切の責任を負いかねます。

目次

第 1 章： はじめに

概要 1-1
このガイドについて 1-1
対象読者 1-1
表記規則 1-2

第 2 章： ドキュメント管理

概要 2-1
Content Server 2-2
コンポーネント 2-2
デスクトップ 2-2
Dynamic Converter 2-2
Content Integration Suite 2-3
Content Categorizer 2-3
Content Tracker 2-4
Inbound Refinery 2-5
基本的な精製プロセス 2-5
PDF Converter 2-6
XML Converter 2-6
Tiff Converter 2-7
Sharepoint Integration 2-7
Verity Integration 2-8

第 3 章： デジタル・アセット管理

概要 3-1
Image Manager 3-1
レンディション 3-1

Video Manager 3-2
コンテンツ・バスケット 3-2

第 4 章： Web コンテンツ管理

概要 4-1
Content Publisher 4-1
テンプレートおよび抽象化 4-2
Connection Server 4-2
Site Studio 4-3
Site Studio Publishing Utility 4-4
Content Portal Suite 4-4
Content Portlet Suite for WebLogic 4-4
Content Portlet Suite for WebSphere 4-5
Content Portlet Suite for Plumtree 4-5
Content Portlet Suite for Sun ONE 4-5

第 5 章： レコード管理

概要 5-1
Content Server 用の Records Manager アダプタ 5-1
Records Manager: Corporate Edition 5-2

索引

1

はじめに

概要

Oracle Universal Content Management 10*g*R3 は、このドキュメントで説明する様々な機能で構成されています。これらの機能は次のように分類できます。

- ドキュメント管理（2-1 ページ）
- デジタル・アセット管理（3-1 ページ）
- Web コンテンツ管理（4-1 ページ）
- レコード管理（5-1 ページ）

この項の内容は、次のとおりです。

- このガイドについて（1-1 ページ）
- 対象読者（1-1 ページ）
- 表記規則（1-2 ページ）

このガイドについて

このガイドには、Oracle Universal Content Management の一連の機能が記載されています。

対象読者

このガイドはシステム・インテグレータおよび管理者を対象としています。

表記規則

このガイドでは次の表記規則を使用します。

- *<Install_Dir>/* という表記は、コンテンツ・サーバー・インスタンスがインストールされているシステム上の場所を参照するために使用されます。
- スラッシュ（/）は、パス名のディレクトリ・レベルの区切りとして使用されます。ディレクトリ名の末尾には常にスラッシュが付きます。
- 注意、技術ヒント、重要な通知、および警告には、次の表記規則が使用されます。

記号	説明
	これは注意です。情報に対し、特に注意を喚起するために使用されます。
	これは技術ヒントです。タスクを容易にするために使用できる情報を示すために使用されます。
	これは重要な通知です。必要な手順または必要な情報を示すために使用されます。
	これは警告です。データの損失または重大なシステム問題の原因となる可能性がある情報を示すために使用されます。

2

ドキュメント管理

概要

ドキュメント管理機能は、Oracle Universal Content Management の基本です。

この項の内容は、次のとおりです。

- Content Server（2-2 ページ）
  - コンポーネント（2-2 ページ）
  - デスクトップ（2-2 ページ）
  - Dynamic Converter（2-2 ページ）
  - Content Integration Suite（2-3 ページ）
- Content Categorizer（2-3 ページ）
- Content Tracker（2-4 ページ）
- Inbound Refinery（2-5 ページ）
- PDF Converter（2-6 ページ）
- XML Converter（2-6 ページ）
- Tiff Converter（2-7 ページ）
- Sharepoint Integration（2-7 ページ）
- Verity Integration（2-8 ページ）

CONTENT SERVER

Product_Name は、様々な Oracle コンテンツ管理製品の基盤です。コンテンツ・ライフ・サイクルのすべての段階（作成および承認から、公開、検索、有効期限、およびアーカイブまたは処理）を管理する、柔軟かつセキュアな、集中化された Web ベースのリポジトリを提供します。組織のすべてのコントリビュータは、ネイティブ・デスクトップ・アプリケーションからコンテンツを簡単に投稿でき、リッチ・ライブラリ・サービスを介してビジネス・コンテンツを効率的に管理でき、Web ブラウザを使用してどこからでも安全にコンテンツにアクセスできます。

すべてのコンテンツは、コンテンツ・タイプに関係なく、管理、再利用およびアクセス用の Web リポジトリまたはデータベースに格納されます。リポジトリでの格納中に、すべてのタイプのコンテンツ（電子メール、ディスカッション、ドキュメント、レポート、スプレッドシートおよびレコードから、イメージ、マルチメディアまたはその他のデジタル・フォーマットまで）は、同じ一連の基本的なコア・サービスを受けます。

コンポーネント

拡張機能を提供する多数のコンポーネントが Content Server とともに提供されます。これらのコンポーネントはコアにまとめられ、インストール時に選択できます。または、CD の extras ディレクトリから利用できます。

デスクトップ

Desktop Integration Suite は、デスクトップ・エクスペリエンスを Content Server とシームレスに統合するために役立つ一連の埋込みアプリケーションを提供します。特に、Microsoft Windows エクスプローラ、Microsoft Word や Excel のようなデスクトップ・アプリケーション、および Microsoft Outlook や Lotus Notes のような電子メール・クライアントからコンテンツ・サーバーへのアクセスが容易になります。

結果として、コンテンツ・サーバーにログオンして Web ブラウザを使用するかわりに、簡単にデスクトップから直接コンテンツ・サーバーのファイルを管理したり、ユーザーとファイルを共有したりできます。

Dynamic Converter

Dynamic Converter は、重要なビジネス・ドキュメント用の変換テクノロジおよびオンデマンドの公開ソリューションです。Dynamic Converter を使用すると、任意のビジネス・ドキュメントを、そのドキュメントの作成に使用したアプリケーションを使用することなく、簡単に特定の対象向けの Web ページに変換できます。その利点は直接的なものであり、独自アプリケーションのボトルネックなしに自由に情報を交換できます。

最初に Web ブラウザがドキュメントをリクエストすると、ドキュメントを Web ページとして表示する方法を決定するために、一連のルールが適用されます。これらのルールは、Dynamic Converter の主要なコンポーネントであるテンプレートで定義できます。

Dynamic Converter には、次のようなユーザーにとっての利点が多数あります。

- ビジネス・ドキュメントを簡単に Web ブラウザで表示できます。
- ネイティブ・アプリケーション（Adobe Acrobat、Microsoft Word など）が不要です。
- 異なるデバイス（Web ブラウザ、ワイヤレス・デバイスなど）用に、ドキュメントの複数レンディションが可能です。
- テンプレートには Content Publisher との互換性があります。
- レガシー・フォーマットを含めた多くのタイプのビジネス・ドキュメントがサポートされています。

Content Integration Suite

Content Integration Suite（CIS）は、Content Server および Image Server との通信を可能にし、非 J2EE 環境での動作に加えて多数の J2EE アプリケーション・サーバーにもデプロイできます。CIS は、Universal Content and Process Management API（UCPM API）と呼ばれるオブジェクト指向サービス API を介して、サーバーのファイングレイン・サービスへのインタフェースとなります。

この製品には SCS Command Layer と、SCS Command Layer の拡張に関する情報が含まれています。SCS Command Layer は、コンテンツ・サーバーの IDC コマンド・インタフェースを介して Content Server と通信するために作成された、Java Beans として実装された一連のコマンド・オブジェクトです。SCS Command Layer は J2EE のコマンド設計パターンに基づいています。これは、すべてのビジネス・ロジックが、ビジネス・ロジック bean（コマンドと呼ばれます）にラップされ、多くの場合にステートレス・セッション Bean として J2EE 環境に実装されている呼出し元オブジェクトに実行のため送信されることを意味します。

CONTENT CATEGORIZER

Content Categorizer を使用すると、Content Server 内で複数の分類法を使用できます。Content Categorizer には、すぐに使えるカテゴリ化ツールや機能の他に、サード・パーティ製カテゴリ化エンジン用のオープン API があります。このオープン・アーキテクチャを使用すると、ユーザーはサード・パーティ製のカテゴリ化ツールが提供するルール・セットや分類法を活用できます。結果として、組織の業務上の要件に最も適した分類エンジンを選択できます。たとえば、業界の既存の垂直分類を使用して、管理対象コンテンツを特定のカテゴリおよびサブカテゴリに体系化できます。

Content Categorizer によって、管理者およびコンテンツ・コントリビュータは、Content Server へのチェックイン時にコンテンツを自動的、均一および賢明にカテゴリ化できます。Content Categorizer はバッチモードで使用でき、大量の既存コンテンツを Content Server へ読み込むのに適しています。これにより、管理者は、個々のコンテンツ・アイテムにメタデータを割り当てる必要がありません。一方、エンドユーザーは、新しいコンテンツをチェックインする際に、適切なメタデータを示す Content Categorizer の機能を利用できます。

Content Server の各メタデータ・フィールドにカテゴリまたは特定の値を示すため、Content Categorizer ではコンテンツ・アイテムを分析するための一連のルールを使用します。自動カテゴリ化ルールには、ファイル・プロパティまたはテキスト参照を使用した直接相関、語の一致に基づくスコア計算、ファイルから自動的にプルされた文または段落のサマリー、または特定の言語パターンの認識などがあります。ルール・セットは、他のサード・パーティ製カテゴリ化エンジンでも使用できます。

Content Tracker

Content Tracker を使用すると、Web サイト管理者はキー・メトリックを使用して、サイトのトラフィックおよび Product_Name の使用を分析するためのレポートを定義できます。Content Tracker と Universal Content Management との緊密な統合により、特定のユーザー・プロファイル情報、ユーザー・グループ、または問合せやメタデータ値のグループによって定義可能な任意のコンテンツ・セットに基づくレポートを実行できます。この柔軟性によってきわめて粒度の細かいサイトおよびコンテンツの分析が可能になり、Web チームは、サイトをより戦略的に管理および改良するために不可欠な情報を得ることができます。

Content Tracker では、Web サーバーのログ・ファイル、Web フィルタのログ・ファイルおよび Content Server のデータベース表から収集したデータを使用して、アクセスされたコンテンツ・アイテムに関する情報を生成します。この情報には、メタデータ、ユーザー・プロファイル・データに加えて、ユーザー自身の情報が含まれる場合があります。次に、Content Tracker は、Oracle または Microsoft SQL Server などの任意の RDBMS データベースのデータベース表にこの情報を移入します。このデータベースが移入されると、ユーザーのニーズに従ってカスタマイズされたレポートを生成できます。

Inbound Refinery

Inbound Refinery は Content Server のアドオン・モジュールです。Content Server の入力側（Inbound）でのすべてのファイル変換を管理し、サムネイル機能を提供します。コンテンツが Content Server にチェックインされると、ファイルが変換されます。

Inbound Refinery には Outside In Image Export が含まれており、これは次に使用できます。

- Content Server にチェックインされたファイルのサムネイルの作成。サムネイルはコンテンツの小さなプレビュー・イメージです。Outside In Image Export は、PDF Converter で生成された PDF ファイルのサムネイルの作成にも使用できます。
- Content Server にチェックインされたファイルの、プライマリ Web 表示可能レンディションとしての複数ページの TIFF ファイルへの変換。

Inbound Refinery が Outside In Image Export を使用して実行できる変換の他にも、Inbound Refinery とともに購入して使用できる変換アドオンがあります。Inbound Refinery で変換できるその他のファイル・タイプや各変換の結果は、Inbound Refinery のコンピュータにインストールされている変換アドオンによって異なります。

基本的な精製プロセス

Content Server にファイルをチェックインすると、ネイティブ・ファイルのコピーがネイティブ・ファイル・リポジトリ（*vault* ディレクトリ）に格納されます。ネイティブ・ファイルとは、元のファイルの作成形式（Microsoft Word など）です。

変換するファイル形式が設定されている場合、ファイルは次のプロセスのキューに置かれます。Inbound Refinery は、設定された間隔でキューをチェックします。ファイルが存在する場合、Inbound Refinery は適切な変換アドオンを呼び出し、実際の変換を実行します。厳密な変換プロセスは、Inbound Refinery の設定内容によって異なります。ある状況では、変換は完全にバックグラウンドで実行され、目に見える形での対話は行われません。別の状況では、ファイルがネイティブ・アプリケーションで開かれ、PostScript ファイルに出力されます。次に、このファイルは異なる形式（PDF ファイルなど）に変換されます。この場合、Inbound Refinery マシン上で、ウィンドウは自動的に開いて閉じます。変換されたファイル（Web 表示可能な PDF ファイルなど）は、Web 表示可能ファイル・リポジトリ（*weblayout* ディレクトリ）にコピーされます。これで、ユーザーは Web ブラウザからファイルを表示できます。

変換するファイル形式が設定されていない場合（または変換が失敗した場合）は、Web 表示可能ファイルは作成されず、ネイティブ・ファイルのコピーが *weblayout* ディレクトリに置かれます。これは、ファイルがネイティブ形式でライブラリに渡されることを意味します。ユーザーがファイルを表示するには、ユーザーのコンピュータにネイティブ・アプリケーションをインストールする必要があります。

PDF Converter

PDF Converter を使用すると、ネイティブ・コンテンツ・アイテムを、自動的に Web 表示可能な PDF（Portable Document Format）ファイルで公開できます。ネイティブ形式の PDF レンディションは、Content Server に新しいコンテンツをチェックインすると即座に生成されます。この PDF レンディションにより、ユーザーはネイティブ・アプリケーションをインストールすることなくコンテンツ・アイテムを Web 表示できます。PDF Converter では、Adobe Framemaker、Illustrator、InDesign、PageMaker、Photoshop 以外にも、Hangul、JustSystems Ichitaro、Lotus Smartsuite、Microsoft Office、Microsoft Visio、OpenOffice、Sun StarOffice など、35 以上のファイル形式を PDF に変換できます。

PDF Converter では、最適化されていない PDF ファイルを最適化し、リンク（Microsoft Word のハイパーリンク、mailto リンクおよび目次リンクなど）を処理します。

次の PDF 関連製品やアドオンを使用すると、PDF Converter で生成される PDF ファイルをさらに拡張することができます。

XML Converter

XML Converter を使用すると、非構造型ビジネス・コンテンツに含まれた情報に XML ベースでアクセスできます。XML Converter では、Product_Name に投稿されたコンテンツが、チェックイン時に XML に変換されます。XML Converter は 225 以上のドキュメント・タイプを変換し、Microsoft Word、Lotus WordPro および Corel WordPerfect などの主要なワード・プロセッサ形式をサポートします。また、一般的なスプレッドシート形式、プレゼンテーション形式およびグラフィック形式もサポートしています。

Content Server に新しいコンテンツ・アイテムをチェックインすると、コンテンツが XML Converter で SearchML または FlexionDoc 形式に変換されます。FlexionDoc は非常に冗長で、Microsoft Word ドキュメントのスタイルなどの属性を含めたすべての情報を取得します。そこから、管理者は、SearchML または FlexionDoc ドキュメントを XML 形式に変換する別の XSL ファイルをチェックインできます。また、管理者は、XSL 変換から生成された XML を検証するために、DTD（Document Type Definition）を使用することもできます。変換中にエラーが発生した場合、関連するすべてのドキュメント（元の SearchML または FlexionDoc ファイル、XSL 変換後に生成された XML ファイルおよびエラー・レポート）はチェックインされ、開発者 / 管理者がデバッグできるようにワークフローを介して送信することができます。

XML ファイルは Web ベース・リポジトリで格納および管理されるため、Web ブラウザを使用してどの場所からもアクセスできます。これにより、他のエンタープライズ・アプリケーション、データ交換、再利用、およびその他の形式への再変換などに利用できます。XML Converter には企業レベルのパフォーマンスを備えたすぐに使える XML ソリューションがあり、その一方で W3C 標準の仕様との互換性が確保されています。

XML ファイルから HTML への動的レンダリングについては、Dynamic Converter （2-2 ページ）をお薦めします。

Tiff Converter

Tiff Converter を使用すると、TIFF（Tagged Image File Format）ファイルを Content Server にチェックインし、複数ページの PDF ファイルとして Web 公開できます。

Tiff Converter では、CVISION CVista PdfCompressor または Adobe Acrobat Capture のいずれかを使用して、単一ページの TIFF ファイル、複数ページの TIFF ファイル、または複数の TIFF ファイルを含む zip ファイル（ファイル拡張子が TIFZ、TIZ または ZIP）を単一の PDF ファイルに変換します。また、TIFF から PDF への変換中に光学式文字認識（OCR）が実行されます。これにより、ユーザーは Content Server 内の管理対象 TIFF ファイルに全文検索を実行できます。

Tiff Converter は非常に有用なスキャン・アプリケーションです。Content Server へのチェックイン時に、TIFF イメージを自動的に PDF 形式に変換し、レガシー・コンテンツを簡単に表示できるようにします。リリースされた TIFF イメージの変換がクライアント側またはサーバー側で発生する場合があり、Adobe Acrobat Capture テクノロジが使用されます。TIFF Converter を使用すると、ユーザーはブラウザおよび Adobe Reader を使用し、管理対象のレガシー・コンテンツ（スキャン済ドキュメント）を簡単に表示およびアクセスできます。

Sharepoint Integration

Sharepoint Integration を使用すると、ユーザーは Microsoft SharePoint テクノロジを使用し、Web パーツを使用して Content Server と対話できます。Content Server Web Parts と SharePoint の組合せには、次の 2 つのユースケースがあります。

- SharePoint を使用してドキュメントを共同制作し、次にそれらを Content Server に昇格させ、格納したり、エンタープライズ・システム上で使用したりします。これにより、ユーザーはコンテンツをワークフローを含めて Sharepoint で管理できますが、格納およびリテンションには Content Server を使用します。

- SharePoint のフロント・エンドを使用しますが、コンテンツは Universal Content Management（UCM）システム内の SharePoint の背後に格納します。これにより、SharePoint に精通したユーザーは、多くのタスクにそのインタフェースを使用できます。

このリリースの Content Server Web Parts では、SharePoint サーバーを Content Server WebParts を使用して実行し、Content Server が支援する SharePoint サーバーとすることができます。Web パーツは、SharePoint コンテンツ・リポジトリとリポジトリの両方でも使用できます。コンテンツ・アイテムを 2 つのシステム間で移動できます。これにより、SharePoint に精通した消費者は、既知のインタフェースを使用して Content Server と対話でき、それによってコンテンツの投稿および検索が簡単になります。

VERITY INTEGRATION

Oracle Universal Content Management には、Content Server 用の Verity Integration アドイン・モジュールがあります。Verity VDK6 アドオンを Content Server とともにインストールすると、もう 1 つのコンテンツ検索および取得ソリューションとなります。Verity は、メタデータおよびフルテキスト索引と検索機能を提供します。これは、メタデータだけでなく、ファイル内のすべての単語が索引付けされ、すべての情報が検索可能になるということです。Verity Integration コンポーネントを使用するには、コンポーネントをインストールして構成する必要があります。詳細は『Verity Integration Guide』を参照してください。

3

デジタル・アセット管理

概要

この項の内容は、次のとおりです。

❖ Image Manager（3-1 ページ）

❖ Video Manager（3-2 ページ）

❖ コンテンツ・バスケット（3-2 ページ）

IMAGE MANAGER

Oracle Image Manager を使用すると、様々なサイズおよび解像度のイメージを素早く検索してグループ化し、ダウンロードできます。たとえば、広告、Web ページおよびプレゼンテーション用に、組織のロゴを様々なサイズで利用できるようにする必要があるとします。チェックイン時に、イメージは定義されたフォーマットおよびサイズに自動的に変換されます。ユーザーは標準メタデータを使用してイメージを検索し、レンディションをコンテンツ・バスケットでグループ化し、必要なイメージ・レンディションを単一の圧縮ファイルとしてダウンロードできます。

レンディション

Image Manager により、Image Alchemy で使用する 6 つの事前定義済レンディション・セットがインストールされます。

❖ DefaultGraphicSet: 必須のデフォルト・レンディション・セット

❖ CorporateImage: 共通のコーポレート・フォーマット要件

- ProductCatalog: 高解像度 CMYK、印刷用プルーフ・イメージ
- DigitalPhoto: プロセス・デジタル・フォト
- WebImages: Web アプリケーションおよび Web イメージ用レンディション
- Print: プロダクティビティ・アプリケーションおよびレイアウト・アプリケーション用レンディション

VIDEO MANAGER

Video Manager を使用すると、様々なサイズおよび解像度のビデオを素早く検索してグループ化し、ダウンロードできます。たとえば、イントラネットでのストリーミング、視聴者への公開、またはテープへのコピー用に、企業のトレーニング・ビデオを様々なサイズで利用できるようにする必要があるとします。チェックイン時に、ビデオは定義されたフォーマットおよびサイズに自動的に変換されます。ユーザーは標準メタデータを使用してビデオを検索し、レンディションをコンテンツ・バスケットでグループ化し、必要なビデオ・レンディションを単一の圧縮ファイルとしてダウンロードできます。

コンテンツ・バスケット

コンテンツ・バスケットを使用すると、複数のコンテンツ・アイテムを素早く検索してグループ化し、ダウンロードできます。たとえば、印刷会社に新聞を送信したり、ベンダーに一連のドキュメントを電子メールで送信したりする場合など、組織のロゴを様々な記事とともに送信する必要があるとします。コンテンツ・バスケットを使用すると、任意のコンテンツ情報や検索結果ページからコンテンツ・バスケットに追加するアイテムを選択できます。コンテンツ・バスケットにアイテムを追加すると、「My Content Server」トレイからコンテンツ・バスケットにアクセスして、必要なコンテンツ・アイテムを単一の圧縮ファイルとしてダウンロードできます。コンテンツ・バスケットは、Image Manager と Video Manager の両方で使用できます。

4

WEB コンテンツ管理

概要

この項の内容は、次のとおりです。

- Content Publisher（4-1 ページ）
- Connection Server（4-2 ページ）
- Site Studio（4-3 ページ）
- Site Studio Publishing Utility（4-4 ページ）
- Content Portal Suite（4-4 ページ）

CONTENT PUBLISHER

Content Publisher は、225 以上のファイル・フォーマットを、適切にデザインされた HTML、XML、cHTML または WML フォーマットの完全にリンクされた Web サイトとして自動的に公開するための、テンプレート・ベースの拡張テクノロジを提供する強力なツールです。コンテンツは Product_Name コンテンツ・サーバーで管理するか、標準のファイル・システムに格納できます。単一ソースの公開、抽象化、パーソナライゼーション、スクリプト言語の包含、コンテンツ・リリースのスケジューリング、およびナビゲーションの自動作成などの機能があります。

Content Publisher は、Site Builder および Site Server という 2 つの主要なコンポーネントで構成されています。Site Builder を使用して、Web パブリケーションの作成に必要な情報をすべて取得するためのプロジェクト・ファイルを作成します。次に、Site Builder で手動で変換および公開するか、Site Server を使用してプロセスを自動化します。Content Publisher を Oracle Content Server とともに使用している場合は、コンテンツ・

サーバーからソース・ファイルを取り出し、これを使用して Web 出力を作成できます。本物のサイトに公開する前に、新しい Web コンテンツをステージング・サイトに公開し、承認用にワークフローを実行することができます。

テンプレートおよび抽象化

Content Publisher は、テンプレートと抽象化という 2 つの主要なテクノロジを使用して、公開プロセスを自動化します。変換テンプレートではコンテンツを取得し、ソース・ファイルを変更することなく、標準の HTML Web ページに自動的に変換します。抽象化機能では、多くの異なるソースから作成されたコンテンツを自動的に取得し、コンテンツの要素（タイトル、本文、テキストおよび見出しなど）を合理的に判断します。次に、Content Publisher はこの情報を変換テンプレートに当てはめて、データを専門的な Web ページに変換します。

技術ヒント : Site Server は Microsoft Windows のサービスとして実行できます。

CONNECTION SERVER

Connection Server システムは、インターネット上のデジタル・コンテンツの配信、変換および管理を自動化します。Connection Server システムは、コンテンツ配信者（コンテンツ・プロバイダ）とコンテンツ消費者（サブスクライバ）間の効率的な通信手段となります。コンテンツ・プロバイダとサブスクライバは、配信される情報と、その可用性および配信タイミングについて合意します。コンテンツ・プロバイダは Connection Server を使用し、管理しているコンテンツを認可済のサブスクライバにオファーと呼ばれるパッケージ形式で配信します。

コンテンツの配信は、企業間でも単一の組織内でも行われます。たとえば、報道機関が支局で使用するためにコンテンツを配信することがあります。また、銀行が支店にアプリケーション・ソフトウェアのアップグレードを配信することがあります。Connection Server システムの送信ではコンテンツが区別されないため、あらゆる種類のデジタル情報を配信できます。

Connection Server システムでは、Information and Content Exchange（ICE）、Extensible Markup Language（XML）および Hypertext Transfer Protocol（HTTP）などの業界標準プロトコルを使用しています。Connection Server ソフトウェアは Java プログラミング言語を使用して作成され、スタンド・アロン・サーバーとして設計されています。

Connection Server システムは、次のサービスも提供します。

- ❖ コンテンツのセキュアな配信を確実にするため、自動的にユーザーの UUID（Universal Unique IDentifier）およびパスワードを割り当てます。
- ❖ コンテンツ・プロバイダとサブスクライバとの間の配信関係を追跡します。

SITE STUDIO

Site Studio は、Web サイトの設計に最もよく使用されるアプリケーションです。サイト開発者および設計者に、Web サイト作成用の組込み手順およびカスタム・コードとフラグメントを簡単に再利用するためのカスタマイズ可能なライブラリを提供し、堅固な Web サイトを素早く作成およびデプロイできるようにします。また、Site Studio を使用すると、企業は動的な投稿および表示のための Web サイトを設計開発するだけでなく、それらのサイトを HTML コードで作成されて配信された静的な表示として標準的な Web サーバーに公開することができます。

Site Studio によって自動化および施行される Web サイト作成および投稿のベスト・プラクティスには、次のようなものがあります。

- ❖ Web サイトからの直接のインコンテキスト投稿および更新
- ❖ 階層的な Web サイト構造およびナビゲーション
- ❖ 複数の領域で構成されるテンプレート・ベースのページ
- ❖ コンテンツと表示の分離
- ❖ ナビゲーション構造とその表示の分離
- ❖ セキュアかつ領域レベルのコンテンツ作成および編集
- ❖ WYSIWYG で XML ベースの投稿フォーム
- ❖ 再使用可能なコンテンツおよび XML ベースのフラグメント
- ❖ 単一ソースのコンテンツ管理
- ❖ 複数サイトの管理

また、組織が Web サイトの開発を複数のサイト設計者に分散しつつ、中央の開発者チームで商標や外観に対する管理を行う場合にも、Site Studio を使用して Web サイトを作成できます。Site Studio により、開発者は、再利用可能なドラッグ・アンド・ドロップのレイアウト、フラグメント、ナビゲーション、および独自の Web サイトを開発するためのバックエンド・アプリケーションを統合するコードをサイト設計者に提供するための、カスタマイズ可能なライブラリを作成できます。Site Studio のカスタマイズ可能なライブラリと Web サイト設計用の組込みフレームワークを使用すると、サイト設計者は、HTML やその他のプログラミング言語の知識がほとんど（あるいはまったく）なくて

も、適切に設計された堅固なサイトを作成できます。複数サイトの管理方法について、詳細を確認します。

SITE STUDIO PUBLISHING UTILITY

Site Studio Publishing Utility を使用すると、Site Studio の Web サイトを、Content Server 環境から Content Server が動作していない（つまり、Microsoft IIS や Apache などが動作している）純粋な Web サーバー環境に公開できます。

Publishing Utility では、Web サイトのすべてのリンクを検索（リンクされたすべてのページにアクセス）し、各ページのコピーとすべてのリソース（イメージ、フラッシュ・ムービーなど）をダウンロードして、動的サイトの静的スナップショットを作成します。Web サイト全体（クエリーのコンテンツ、レイアウト・ページ、フラグメント、コントリビュータ・データ・ファイルおよびネイティブ・ドキュメントを含む）がコピーされ、新しいサーバーに公開されます。

Content Portal Suite

Content Portlet Suite は Content Integration Suite の上に構築され、BEA WebLogic、IBM WebSphere、Plumtree および Sun ONE ポータル・サーバー用の作成済参照ポートレットを多数提供します。Content Portal Suite は、コンテンツ・サーバーに格納されたコンテンツへのアクセスを提供し、ユーザーが効率的で使いやすい方法でポータル・コンテンツを更新、検索および表示できるようにします。ポートレットを使用して、コンテンツ作成および配信プロセスを管理できます。これらのポートレットは、組織におけるユーザーのロールおよび権限に基づいて、様々なユーザーに対して有効にできます。ユーザーは権限レベルに応じて、コンテンツの参照または検索、新しいコンテンツ・アイテムの投稿、およびワークフロー全体でのコンテンツの進行状況の表示ができます。

Content Portal Suite を使用してポータルと Product_Name を統合すると、簡単な方法でポータルを最新の状態に維持できます。これによって利用性が向上し、メンテナンス・コストが減少してポータル投資に対する収益が増加します。

Content Portlet Suite for WebLogic

Content Portlet Suite（CPS）for WebLogic は、BEA WebLogic ポートレット・サーバーとの信頼性のあるスケーラブルな統合を提供します。このスイートでは、Content Integration Suite（CIS）を、WebLogic との統合の基本レイヤーとして利用します。このスイートは、8 つの参照ポートレット（Library、Authenticated Library、Basic Search、Authenticated Search、Saved Search、Contribution、Workflow Queue および Metadata

Administration）を提供します。これらはすぐに使用することも、Content とともに WebLogic ポートレットを実装する方法の例として使用することもできます。

Content Portlet Suite for WebSphere

Content Portlet Suite（CPS）for WebSphere は、IBM WebSphere ポートレット・サーバーとの信頼性のあるスケーラブルな統合を提供します。このスイートでは、Content Integration Suite（CIS）を、WebSphere との統合の基本レイヤーとして利用します。このスイートは、8 つの参照ポートレット（Library、Authenticated Library、Basic Search、Authenticated Search、Saved Search、Contribution、Workflow Queue および Metadata Administration）を提供します。これらはすぐに使用することも、WebSphere ポートレットを実装する方法の例として使用することもできます。

Content Portlet Suite for Plumtree

Content Portlet Suite（CPS）for Plumtree は、Plumtree ポートレット・サーバーとの信頼性のあるスケーラブルな統合を提供します。このスイートでは、Content Integration Suite（CIS）を、Plumtree との統合の基本レイヤーとして利用します。このスイートは、8 つの参照ポートレット（Library、Authenticated Library、Basic Search、Authenticated Search、Saved Search、Contribution、Workflow Queue および Metadata Administration）を提供します。これらはすぐに使用することも、CIS とともに Plumtree ポートレットを実装する方法の例として使用することもできます。

Content Portlet Suite for Sun ONE

Content Portlet Suite（CPS）for Sun ONE は、Sun ONE Integration Server との信頼性のあるスケーラブルな統合を提供します。このスイートでは、Content Integration Suite（CIS）を、Sun ONE との統合の基本レイヤーとして利用します。このスイートは、8 つの参照ポートレット（Library、Authenticated Library、Basic Search、Authenticated Search、Saved Search、Contribution、Workflow Queue および Metadata Administration）を提供します。これらはすぐに使用することも、CIS とともに Sun ONE ポートレットを実装する方法の例として使用することもできます。

5

レコード管理

概要

Oracle Universal Content Management には、Content Server 用の Records Manager アダプタまたは Records Manager Corporate Edition があります。この項の内容は、次のとおりです。

❖ Content Server 用の Records Manager アダプタ（5-1 ページ）

❖ Records Manager: Corporate Edition（5-2 ページ）

CONTENT SERVER 用の RECORDS MANAGER アダプタ

Content Server URM アダプタは、保存ポリシーを管理する URM とコンテンツを格納する Content Server システムとの間のブリッジとなります。また、Content Server URM アダプタは URM サーバーに情報を返信するため、企業の重要なコンテンツの最新のカタログを維持できます。したがって、組織はより多くのコンテンツに、より一貫性のある保存ポリシーを適用でき、管理の手間およびユーザーへの悪影響はより少なくなります。これらの利点は、訴訟の検索および保持にも同様に当てはまります。

RECORDS MANAGER: CORPORATE EDITION

Records Manager Corporate Edition は、保存スケジュールに従って効率的にコンテンツ・アイテムを管理します。コンテンツ・アイテムの保存管理は、保存コストが保存価値を上回るコンテンツの計画的な削除に重点が置かれる傾向があります。

索引

B

BEA WebLogic ポータル・サーバー， 4-4

C

Content Portlet Suite（CPS）
- BEA WebLogic，4-4
- Plumtree，4-5
- Sun ONE，4-5

CPS（Content Portlet Suite）
- BEA WebLogic，4-4
- Plumtree ポータル・サーバー， 4-5
- Sun ONE，4-5

P

Plumtree ポータル・サーバー， 4-5

S

Stellent
- サポート， 1-2

Sun ONE ポータル・サーバー， 4-5

W

WebLogic ポータル・サーバー， 4-4

さ

索引のエントリ， 1-1，2-1
- 2 次レベルのエントリ， 1-1，2-1

サポート， 1-2

と

統合キット
- BEA WebLogic，4-4
- Plumtree，4-5
- Sun ONE，4-5